

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流る、大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。諸も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな 曾良

松尾芭蕉 奥の細道

兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、甍を覆て雨風を凌。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂



松尾芭蕉



雨降る、馬に乗る

五月十二日
(陽暦六月二十八日)

登米から、涌津・金沢
そして一関へ

元禄2年(1689年)5月12日
(新暦6月28日)の朝、芭蕉と曾良は、
登米(宮城県登米市登米町)の検断
庄左衛門の屋敷を出発、一関を目指
して北へと旅立ちました。

この日、芭蕉が辿った道は、概ね
現在の国道342号線すなわち「一
関街道」にあたります。沿道には、
旧街道の面影を残す松並木や宿場の
雰囲気ただよう家並みも見られて、



一関街道の松 花泉町永井の街道筋ところどころに
嘉永の松、明治松などかつての並木の松が残る。

訪れる人を「おくのほそ道」の歴史
ロマンへと誘います。

芭蕉と曾良は降り出した雨の中、
一関街道を北上し、上沼新田町(宮
城県登米市中田町)を通過します。

新田という名前が示すように、芭
蕉の時代、この辺りは開拓中だった
かも知れません。ひなびた街道を進
むと、やがて道は涌津(一関市花泉
町)の集落に入ります。店蔵や家並
み、鉤の手に曲がる道に往時のおも
むきが漂います。また、涌津は坂上
田村麻呂創建と伝えられる八幡神社



導心塚 即身成仏の修行者至心導士の塚。この沿
道を通して一関に入ったと推定されている。



牧沢八幡神社 牧沢は藤原時代からの馬産地です。
神社境内の杉は樹齢五百年、芭蕉もこの杉を見たに
違いない。

や、千三百年代の柴館跡など史跡も
多いところです。

雨脚が弱まるきざしはなく、芭蕉
はここで馬を借りて道を急ぎ金沢宿
に入りました。ここから一関までは、
大槻を経て大門に出る一関街道が一
般的ですが、当日は川も増水してお
り金沢宿の入口手前で金沢川(金流
川)を徒渡りし、大槻から右手の山
越えの道を選んだものと推測されま
す。そして「皆山坂」ばかり3里の
道程を馬にまたがり「合羽も通る」
程の豪雨に打たれながら一関を目指
しました。

大槻からは国道342号線をそ
れ、庵寺の坂道を、北に向かいます。
新供養敷坂、団子坂、米坂を通り抜

けやがて五合坂が見えてきます。現
在、車が通れる新しい道になってい
ますが、当時の道はかなりの急坂で、
その痕跡が今に残り、地元の人たち
によって刈払いなどを行い歴史の小
路として保存されています。

五合坂を登りきったところに樹齢
二百年の杉の大本と、その根元に導
心塚があります。導心塚からは果樹
園と田圃が広がり、心なし気分も軽

やかになります。そして牧沢八幡神
社、矢ノ目沢、追分まで進みます。
追分からカッパ崖までの尾根伝い
に続く道は古来「細布長根」と呼ば
れ由緒ある道です。

前方にJ R 一関駅の跨線橋が見
えてきました。「合羽も通る」程の
雨もいつの間にか止み、栗駒の山が
夕焼けで染まっています。芭蕉も馬
から降り歩き始めたことでしょう。



カッパ崖 その由来は、崖の下沢川からカッ
パが這い上がったとか、旅人がここで合羽を脱
いで一服したとか。



周辺の見処

稻荷山宝寺院

金沢八幡神社の西隣にある。明徳
四年(1393)開基。山門は江
戸時代の建築様式を伝える精緻な
造りで、楼上には十六羅漢が安置
されている。岩手県文化財指定。



金沢宿の街並み

上戸近辺は、現在でも「宿たつみ
や」「宿もいしや」「宿大林や」
など宿場の屋号が残り、各家々の
入口には行灯が掲げられ、当時の
宿場の様子が窺い知れる。



周辺の見処

金沢金流橋

当時、この橋は掛かっておらず、
一関に行くには、金流川を徒渡り
しなければならなかったが、増水
のため芭蕉は山越えの道を行くこ
とになったという。



有壁本陣

金沢宿より一関まで、芭蕉の道は
明らかでない。大門を通過して一関
街道から分かれ、奥州道中を北
上する道も想定され得るコースだ。
その途中に位置する旧有壁本陣は、
国の史跡に指定されている。



一ノ関、黄昏に着く

五月十二日

(陽暦六月二十八日)

旅のクライマックスに
二夜を過ごす

一関の宿にたどり着いたのは夕闇
せまる黄昏時でした。中世の昔から
交通の要衝として栄えた一関は、古
くは平泉への南の玄関口となった地
でもあります。仙台藩の支藩とし
て近世を迎えましたが、芭蕉が訪れ
た頃は、領主田村氏が江戸幕府直
属の家臣としてなかば独立しており、



3万石の城下町として栄えていました。
芭蕉と曾良は一関に2泊していま
すが、宿の正確な場所は定かではあ
りません。今のところ、磐井川の西
岸、地主町周辺と、概ね推定されて
います。当時、平泉に最も近い宿場は、
磐井川対岸の山ノ目村にありました。
あえて一関の城下を宿所と定めた事
には、何かそれなりの理由があった
のかも知れません。

芭蕉一行は、一関に前泊し翌日平
泉を見学した後、再び同じ宿に戻っ
たようです。宿の主が風呂を沸かし
て芭蕉の帰りを待っていたのです。一
関は元禄の昔から、平泉を訪ねる旅
人にとっておあつらえの宿泊地だっ
たのでしょう。

三諸説があり未だ確定できない

一関の宿泊地

現在、磐井橋のたもとに二夜庵跡の
顕彰碑が建っている。これも諸説があり、
未だ確定出来ない部分が多い。主は、風
呂をわかつて待っていたとあり、旅館で
はなかったかとも思わ
れる。地主町金森家
(二軒ある)や白土家
という説もある。



周辺の見処

大槻三賢人像

オランダ語の入門書「蘭学階梯」
を出版した大槻玄沢、開国論者とし
て知られる儒学の磐溪、わが国
最初の辞書「言海」を編纂した文
彦は日本の近代化に貢献した一関
の偉人。一ノ関駅西口正面。



釣山公園

市街地に隣接した小高い丘で、こ
の地を治めた田村家の田村神社が
鎮座する。春には満開の桜、秋に
は真赤な紅葉が人々を楽しませて
くれる。



周辺の見処

毛越寺庭園

奥州藤原氏によって造営された壮
大な伽藍は、ここごとく消失し今
は礎石を残すだけだが、往時のま
まの優れた庭園が復元整備されて
いる。芭蕉は訪れなかったが、芭
蕉真筆の「夏草」の句碑もある。
境内は国の特別史跡・特別名勝と
二重の指定を受けている。



柳之御所遺跡

奥州藤原氏の政庁「平泉館」跡と
推定される遺跡。一帯が国史跡に
指定されており、現在史跡公園と
して整備が進められている。芭蕉
が訪れた頃には、一面の田野だっ
た。たくさん発掘出土品が陳列
される「柳之御所資料館」には是
非立ち寄りたい。



まづ高館にのぼれば

五月十三日

(陽暦六月二十九日)

絶景を眼前に、英雄の最期に
思い馳せて、しばし涙する

巳の刻(午前10時頃)、前日とはうっ
て変わり晴れ渡る夏空の下、芭蕉と
曾良は磐井川を渡り、一路奥州道中
を北へ、平泉を目指しました。街道
を進み太田川を越えると、そこはか
つて奥州藤原氏が栄華を極めたところ
ですが、その跡形は何もなく、田
野がうち続くばかりでした。万物は
流転し、無常の風が吹きわたります。
平泉は、源義経終焉の地。折し
も、その没後五百年という節目の年



高館からの眺望 眺望平泉第一といわれ、芭蕉ならずとも詩情が
かき立てられる風景。



高館義経堂 芭蕉が訪れる6年前の建立にな
るが、この堂のことは記されていない。



卯の花清水 涌水の傍らに曾良の句碑が建て
られたことから名付けられた。



毛越寺境内の芭蕉句碑「夏草や 兵どもが 夢の跡」
左が真筆句碑で芭蕉の甥・也寥禅師が建立した。

千歳のかたみとなれり光堂

急常の風にあらがう御堂と向き合い、芭蕉はもうひとつの真相に辿りつく

高館のふもとの、深い切り通しを抜けて桜川の土橋を渡ると、中尊寺の参道が見えてきます。老杉が道の両側を取り囲む月見坂をのぼり、さらに道を奥に進むと、目的の二堂があらわれました。すなわち、中尊寺金色堂と経蔵です。当時金色堂は茅

葺きの覆堂の中にありました。芭蕉と曾良は、僧の案内のもと薄暗い堂内に足を踏み入れ、金色堂の荘厳と須弥壇に安置された御遺体について説明をうけたことでしょう。

当時の金色堂は、内外におかれた金箔も万宝の限りを尽くした装飾も多くが幾百年の時を経て失われていました。けれど、檀上の諸仏も御遺体もかつてのまま、そのままに在るという真実が芭蕉の心を突き動かし



金色堂（新覆堂） 外観は1965年に建設された覆堂で、金色堂はこの覆堂内に収められている。



月見坂 江戸時代初期、伊達藩によって植樹された杉並木が金色堂へと続く



たのです。高館とは違うもうひとつの境地へと導くこの感慨が「五月雨」の句に結実されることになります。続いて芭蕉と曾良は経蔵に向かいましたが、別當の僧が留守だったため、開帳はかきませんでした。その後の二人の足取りについては、諸説あつて定かではありませんが見晴らしのよい所から眼下の衣川や泉ヶ城、はるか西方の霧山に思いを馳せつつ、帰路についたものと思われま



中尊寺経蔵 曾良の日記から堂内の実見が叶わなかったことが知られている。



芭蕉句碑（中尊寺境内）「五月雨の降り残してや光堂」

天気吉、一ノ関ヲ立

五月十四日

（陽暦六月三十日）

平泉の感慨を胸におさめ、山道沿いを岩出山に向かう

念願の平泉を探訪した芭蕉は、再び二夜庵に宿をとり、翌朝十四日、出羽の国を目指して旅立ちました。

芭蕉が訪れた当時の地主町から大町・百人町（新大町）は外堀を挟んで商家や下級武士の住い、内側は上級武士の住いとなっており、南北に八幡小路、広小路、中小路、川小路と並びます。中小路は現在、歴史の

小路となっており武家住宅など見学が出来ます。内堀に囲まれ釣山の麓が藩主居館となっていました。現在の一関簡易裁判所周辺です。

地主町から大町・百人町を南下、台町に入り右手に由緒ある八幡神社、願成寺を見やりながら程なく、奥州街道と迫街道の分岐点になります。

この道を右手に進路をとり、さらに進むと二七〇年以上前に建立された「これ従右ははざま道、左はせんだい道」の道標をみる事が出来ます。



長昌寺「時の太鼓」 現在、時の太鼓は顕彰会によって引き継がれ、あらゆる祭事の先導役として活躍している。

すぐ近くには田村家の菩提寺である祥雲寺があります。境内には田村家に関する資料を展示した田村記念館があり見学をお勧めします。また、和算の大家千葉雄七胤秀や蘭学医学者建部清庵の顕彰碑も見逃せません。緩やかな坂がさらに続き、次に見えてくるのが長昌寺です。本堂にある太鼓は、藩政時代、皇居、幕府、御三家に限られていた「時の太鼓」による時報を許された由緒あるものです。当時「一関にすぎたるもの」と近隣から羨ましがられました。現在、二代目時の太鼓は新幹線一ノ関駅コンコースに展示してあります。

周辺の見処

酒の民俗文化博物館

大正時代の酒蔵で、一六〇〇点を超える酒造りの道具の一部を展示。館内は「文学の蔵」が併設され、島崎藤村、井上ひさしなどゆかりの作家の資料を展示している。



旧沼田家武家住宅

江戸時代後期に一関藩家老職を務めた沼田家の住宅を復原。創建は18世紀の初頭から中ごろと推定され約三百年の歴史を有する。



迫街道分岐点 左手は奥州街道（国道四号線）右手が芭蕉の歩んだ迫街道だが、現在は一方通行で車は進入禁止。



祥雲寺田村記念館 田村家に関する資料を展示、一切経蔵や伊達兵部宗勝の母・保性院廟も拝することが出来る。

蔵主沢から刈又一里塚へ
岩出山はまだはるか彼方

長昌寺を過ぎ、刈又に進んでいく途中に「新山一里塚」があります。

この一里塚は磐井橋たもとと刈又一里に立てられております。さらに進むと道は三つに分岐、左の道は田圃と集落の間を縫って山間部へ延び、右の方は市道の延長で刈又に続いています。これらの道に挟まれるように山があり「奥の細道・真柴字蔵主沢」の標柱がみえます。

この道の上り口は「女ころし坂」とも呼ばれ、次のような悲話が残されています。



蔵主沢入り口 今は雑草が生い茂るが、旧道の跡は残っており歩く事も出来る。

「栗原郡稲屋敷村の女が磐井郡中里村の男に嫁いたが、離縁となった。しかし夫婦の愛情は続いており、女は再婚祈願のため舞草観世音に願掛けに行った。夕暮れの帰り道、偶然にも出くわした男は、暗さのあまり怪女と見間違ひ殺してしまつたが、よく見ると愛する妻であつた。男は出家して生涯、妻の菩提を弔つた」

そのような悲しい話を胸に秘め、蔵の中の山道を二十分ほど歩くと田圃道になり、やがて「刈又一里塚」の入り口にたどり着きます。案内板の左の道を進めば「ひじまがり坂」、さらに峰まで登れば刈又の一里塚に到着します。ここから道はなだらかとなり、芭蕉と曾良は思い出深き一関と別れを告げ、岩出山を目指しました。



パンフレットについてのお問い合わせ、ガイドのお申し込み

- ❖ **いわいの里ガイドの会** 岩手県一関市田村町2-18 (旧沼田家武家住宅内)
tel & fax 0191-21-8188
<http://business4.plala.or.jp/iwaguide/top.htm>

一関市観光のお問い合わせ

- ❖ **(社)一関観光協会** (駅案内所) 岩手県一関市駅前1
tel 0191-23-2350 fax 0191-23-0066
<http://ichinoseki-kankou.jp/>

発行

- ❖ **一関市役所商業観光課** 岩手県一関市竹山町7-2
tel 0191-21-2111 (代) fax 0191-31-3037
<http://www.ichitabi.jp/>



一関観光 HP はこちらから▲



刈又一里塚 右の古田側の塚には樹齢数百年を思わせる古木の切り株が残され、往時の面影を今に伝える。